

観峰書道

習字手本付録

Kampo School of
Calligraphy

発行日 2010年8月

発行者 原田由利

発行所 観峰文化センター

住所 〒606-8334

京都市左京区岡崎

南御所町 40-20

© 原田詳経 無断転載を禁ず

筆者

原田 観峰

1911~1995

正統書法を伝える書道教範の筆者
美しい心と伝統の妙技伝承者



KAMPO

書塾出版

www.kampo.co.jp

〔碑法帖の見方〕

書道の研究が、中国の碑版や法帖によって行われることが多いことはいまでもない。碑法帖には、原拓、復刻、旧拓、新拓があり、これを見極めるだけの見識をもつことは書道研究にとつて最も急務といわなければならぬ。この原田観峰によつて書かれた臨書手本は、研修者が直接原拓から学ぶ難しさに配慮して、それぞれの拓本の厳しい書法の特徴をよく示しているものである。

〔孔子廟堂碑〕 虞世南

北方民族政権隋が倒れたあと隋帝室の一族であり、やはり北方系の唐の高祖によつて唐が建国されたが、高祖ならびに太宗は漢民族文化の尊重により、中国全土の大衆の支持を得ようとした。この碑は、唐の政治姿勢を孔子の道におくことを天下に示すためにつくられたものである。

虞世南は、唐の初代皇帝高祖の信頼厚く、二代皇帝太宗から最も敬愛され、当時の最高の文化人として尊敬された人である。虞世南七十歳の書。初唐最初の刻石は幾度も火災で亡んだのであるが、今日拓本として伝わるものは西廟堂ができた時改刻されたものである。虞世南の楷書はこの碑のみで、品位が高く、温雅にて風韻豊かな書と評されている。

〔初唐の三大家〕

本来、書法は篆書から始まり、篆書が変じて隸書となり、隸書が変じて楷行草となったが、唐代になつてその形質ともに整つてきた。その源流は晋から出ている。ところが、晋の楷書の真本の伝わるものは一つもなく、王羲之の法書楽毅論にしても黄庭経にしても、みな後世の模刻を経ている。従つて晋の書法の真髄はむしろ唐の楷書の石碑に求めるべきである。

唐代になると歐陽詢、虞世南、褚遂良のいわゆる初唐の三大家を輩出した。年代的にみると、
歐陽詢(557-641)と虞世南(558-638)はほぼ同時であり、褚遂良(596-658)が最も後輩にあたる。
またそのころの書人として、顔真卿(581-645)、孫過庭(648-703)などがあげられる。
唐においてもつともすぐれている代表作は、

- ① 雁塔聖教序 (褚遂良)
- ② 孔子廟堂碑 (虞世南)
- ③ 九成宮醴泉銘 (歐陽詢)

といわれている。欧陽詢と虞世南はそれぞれの書風は異なっているが、楷書の原則を示しているといわれる。この三碑はいずれも王羲之の血脈を受けついでいるもので、晋の書法をよく伝えている。後の人は欧陽詢の化度寺塔銘を評して「王羲之の正書は今ほみることができず、千古の秘密であるけれども、研鑽精思、ついにその天然の風神を悟得した」と述べている。